

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：82723

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12212

研究課題名（和文）現代社会におけるスーフィズムの意義とタリーカの役割 - スーダンとエジプトの比較研究

研究課題名（英文）Significance of Sufism and Roles of Tariqa in Contemporary Societies: A Comparative Study of Sudan and Egypt

研究代表者

丸山 大介 (Maruyama, Daisuke)

防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群）・人文社会科学群・准教授

研究者番号：60749026

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、スーフィズム（イスラーム神秘主義）に基づく思想と実践が現代のタリーカ（スーフィー教団）においていかに保たれているのか、またスーフィズムとタリーカが現代社会においていかなる意義と役割を有しているのかについて、より一般化された枠組みの中で理解するための基盤を構築しようと試みた。とりわけ、タリーカについて、スーフィズムの知識や実践を再生産する場として概念的に捉える研究に着目する必要性を示し、スーフィズムに関する思想や実践が人々のコミュニティへの参加と協働を通じて生起する場としてタリーカを捉え直す視点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、スーフィズム（イスラーム神秘主義）をその思想面に限らず、タリーカ（スーフィー教団）の諸活動に着目することによって、社会や政治との関わりという視座から理解しようと試みた点である。とりわけ、個人の救済と社会の変容とを同時に実現しようとするスーフィズムの現代的様相の一端を明らかにした点が重要である。また、スーフィズムが寛容・共生・互恵といった理念の形成に果たす役割を考察しただけでなく、対抗勢力との関係における排他的なスーフィズム像も分析している。社会・政治状況によって寛容と排他の間で揺れ動くスーフィズム像を明らかにしたという点で、スーフィズム＝寛容という図式を相対化する意義も持つ。

研究成果の概要（英文）：This study aims to establish a foundation for understanding how Sufism-based thoughts and practices are maintained in contemporary tariqa (Sufi orders), as well as the significance and role Sufism and tariqa play in contemporary society. Particularly, this research emphasizes the necessity of focusing on studies that conceptually view tariqa as a place where Sufi knowledge and practices are (re)produced, and has proposed a new perspective on tariqa as a place where Sufi-related ideas and practices are generated through the participation and collaboration of community members.

研究分野：イスラーム研究

キーワード：スーフィズム タリーカ 神秘主義 聖者崇敬 スーダン エジプト

1. 研究開始当初の背景

スーフィズム(イスラーム神秘主義)の理論枠組みについては、東長靖が「スーフィズムの三極構造論」を提起している(東長靖 2002「スーフィズムの分析枠組」『アジア・アフリカ地域研究』第2巻)。これは、スーフィズムの神秘主義的な側面やエリートによる知的営為という側面のみならず焦点を当ててきた従来の思想研究への反省から、民衆の宗教実践という視点を取り入れ、神秘主義・道徳・民間信仰という3つの極からなるスーフィズム像を描くものである。この構造論は、各極に対して変数を与えることで、異なる時代や空間における、さまざまなスーフィズム像を提示しようという試みであった。申請者は教団研究の立場からこの「三極構造論」を批判的に検討し、神秘主義・道徳・民間信仰とも個人の内面性を強調しすぎており、タリーカ(スーフィー教団)において涵養されるスーフィズムには「共同性」という観点を考慮に入れるべきだと主張し、スーフィズムを「超越性・規範性・共同性」という視座から理解する枠組みを提示した(D. Maruyama 2015 “Redefining Sufism in its Social and Political Contexts: The Relationship between Sufism and Salafism in Contemporary Sudan,” 『イスラーム世界研究』第8巻)。

タリーカは、イスラーム的知やスーフィズム思想を学修する場であるだけでなく、教団員の相互扶助を促したり、貧者への支援や治癒行為の提供を行ったりする互助組織、過激派組織や原理主義勢力の台頭を批判し、寛容で包括的な社会の実現を目指す社会組織としての顔も持つ。それゆえ、タリーカの活動における「共同性」を考慮に入れることで、スーフィズムが個人の魂の救済だけでなく、人間関係の構築や社会変革の試みといった社会や政治への関与をも志向する思想運動であることが明らかになる。ただし、これはスーダンのタリーカで論じられるスーフィズムをもとに確立した概念であり、イスラーム世界に広がるスーフィズム一般を理解する枠組みには程遠い。そのため、他の国や地域におけるスーフィズムやタリーカの様態を検証し、共同性をめぐる議論を精緻化させていく必要があり、従来の研究地域であるスーダンに加え、エジプトを調査地に加え、スーダン・エジプトの双方で活動するタリーカを研究することとした。

2. 研究の目的

現世での生の充実と来世での救済を求め、神に至る道を探求する思想たるスーフィズム(イスラーム神秘主義)と、教団員が共に神に至る道を進むべく宗教実践に励む集団たるタリーカ(スーフィー教団)の研究は、イスラームにおいて、超越的な神と世界内存在たる人間とが社会の中でいかに結びつこうとしているのかを知る上で重要である。申請者はスーダンのタリーカを事例に、教団内での諸実践や人間関係を通じて培われる相互扶助や相互尊重の精神に基づく「共同性」のあり方を検証してきた。本研究では、従来行ってきたスーダンでの研究を基盤にしつつ、調査地をエジプトへ拡大し、両国で活動するタリーカの具体的諸活動(教育活動や社会福祉活動など)と、タリーカの活動の基礎となるスーフィズム思想を考察する。その上で、エジプトとスーダンにおけるスーフィズム思想とタリーカの活動に見られる共通性と地域的特性を明らかにし、スーフィズムに基づく思想と実践が現代においていかなる意義と役割を有しているのかについて、より一般化された枠組みの中で理解するための基盤を構築する。

特に、本研究では以下の3つの問いを明らかにすることを目的とする。まず1) 都市化の進展や公教育の普及、伝統規範の崩壊や宗教的価値の見直しが進む中で、スーダンとエジプトのタリーカがいかにして現代の社会環境に即した形で、スーフィズムに基づく信仰規範や社会規範を構築しているのかを考察する。同時に、2) タリーカが、過激派組織や原理主義勢力に対抗する形で、いかにして社会状況の変革を実現しようとしているのかを検証する。その上で、3) スーダンとエジプト両国で活動するタリーカの活動やそこで共有されるスーフィズム思想を比較し、上記2教団の思想や実践にはどのような共通点や地域的特性があるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、スーフィズム(イスラーム神秘主義)思想とタリーカ(スーフィー教団)の活動が両国の社会的・政治的情勢の中でいかなる実際の意義を有しているを明らかにすべく、以下の4つの研究方法を用いる。

(1) スーフィズムとタリーカに関する文献・資料調査

調査対象：教団が発行する書籍や雑誌(たとえば、イスラームやスーフィズムに関する理論的論説と社会動向を反映した時事的論説を含んだ、アズミー教団発行の雑誌『イスラームは祖国(al-Islam watan)』など)、教団実践で扱われる思想書や祈禱書、教団運営のホームページの記事内容などを調査対象とする。上記文献の精読を通じて、教団によるスーフィズムの現代的解釈、スーフィズム関連文献に好んで選択されるトピックとその理由、教団の広報戦略などを明らかにする。

(2) スーダンとエジプトでの臨地調査

スーダンとエジプト両国にて、教団員への聞き取り調査および教団活動の参与観察を行う。まず 1) それぞれの教団の基本データ（教団の規模、活動理念や活動内容、教団員の属性や入団理由など）を収集・分析する。次に、2) 教団の思想的特徴や宗教実践、3) 教団規則の浸透度と教団員の帰属意識、4) 教団が提供する教育活動や社会福祉活動の内容と人々の参画度、5) 過激派や原理主義勢力に対する教団員の意識、6) 当該社会の人々が持つ教団の印象を明らかにする。

(3) スーダンとエジプトの比較研究

スーダンとエジプト両国で活動するタリーカの活動や教団内で奉じられているスーフィズム思想の比較を通じて、1) 教団全体の活動指針と各地における個別具体的な活動内容、2) 教団の活動が生み出す社会関係のあり方、3) スーフィズム思想が当該社会の人々に与える影響などに見られる共通点と差異を分析する。また、グローバル化の進展や情報アクセス網の多様化に伴い、タリーカがエジプトとスーダンの間でいかなるネットワーク網を形成しているのか、両国の教団間でいかなる交流がなされているのかを解明する。

(4) 理論研究

上記(1)から(3)の研究を通じて、社会的・政治的脈絡の異なる両国において、スーフィズムがいかなる意義を有しているのか、また、タリーカがいかなる社会的役割を果たしているかを検証し、現代社会におけるスーフィズムとタリーカの諸相を分析する枠組みを確立する基盤を作る。

4. 研究成果

当初の研究計画ではスーダンとエジプトでフィールドワークを行う予定であったが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大やスーダン情勢の不安定化により、計画通りに現地調査を行うことができなかった。そのため、すでに入手済みの文献資料の分析などを軸に据えた研究に切り換え、下記の成果を得た。

スーフィズムとタリーカに関する研究

スーフィズムとタリーカの連関について、とりわけスーダンのタリーカに焦点を当てて、タリーカの活動の中でスーフィズムがどのように論じられているのかを、イスラームにおけるパーティン（信仰の内面的側面）とザーヒル（信仰の外面的側面）というキーワードから考察した。スーフィズムにおいてはしばしば内面性の充実が強調されることがあるが、現代の文脈では外面的規範を重視するとともに、内面性と外面性のバランスを保つことが特に重要であると強調されていた。また、スーダンで活動する特定のタリーカに関して、サンマーニー教団のシャイフ（導師）を務めたアブドゥルマフムード・ハフヤーン（d.1973）が執筆した著作群の分析を行った。彼は主に9世紀から12世紀に活躍したスーフィーの説を引用しながら自身の論を組み立てており、彼独自のスーフィズム思想を打ち立てることよりも、従来重視されてきたスーフィズム理論を継承することに重きを置いている点が明らかとなった。

スーフィズムとタリーカが密接に関わり合う聖者崇敬に関する研究

スーダンにおける聖者崇敬の有り様をタリーカで行われる諸実践との関連から考察し、スーダンにおいて神と人との媒介者たる聖者が人々にどのように捉えられているかを明らかにした。また、タリーカのシャイフが眠る聖者廟を参詣する実践（聖者廟参詣）を通じた生者と死者との交流に関する研究を行った。聖者廟参詣はしばしば対抗勢力による批判にさらされることもあるが、「不在」の死者（シャイフ）に対し神への取りなしを祈願することで、現状の改善や変化を目指す聖者廟参詣について、タリーカがどのような論理で仲介者や取り成しに対して正当性を与えてきたかについて明らかにした。

タリーカ概念の再考

タリーカという概念を用いる際の問題点を整理した上で、現代のタリーカ（あるいは、それに類する集団）を分析する際の視座を提案した。タリーカを研究する際の課題としては、大まかに1) 時代や地域を越えて多様に存在するスーフィズムに関連する集団を「タリーカ」という語のみで分析してよいのか、2) 「スーフィー教団」や「神秘主義教団」に代表される訳語は適切か、3) タリーカの活動に参加する人々のどこまでを分析対象に含むのかといった点がある。こうした諸問題に対し、タリーカを教団に所属するメンバーのみからなる「閉じた組織」として分析するのではなく、スーフィズムの知識や実践を再生産する場として概念的に捉える研究に着目する必要があることを示した。その上で、スーフィズムに関する思想や実践が人々のコミュニティへの参加と協働を通じて生起する場としてタリーカを捉え直す視点を提示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 丸山 大介	4. 巻 15
2. 論文標題 <小特集 スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明に向けて>タリーカ研究の課題と方向性 --実践コミュニティから見るスーフィズムと集団--	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 イスラーム世界研究	6. 最初と最後の頁 149 ~ 162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/269331	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸山 大介	4. 巻 541
2. 論文標題 スーダンにとってのイスラームとイスラエル イスラーム主義者の言説を中心にー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中東研究	6. 最初と最後の頁 68 ~ 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 丸山 大介
2. 発表標題 ふだん着のスーフィズム - 現代スーダンにおけるスーフィズムの多様性 -
3. 学会等名 日本イスラム協会2022年度前期公開講演会「イスラーム理解講座ースーフィズムとはー」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸山 大介
2. 発表標題 タリーカ概念の問題点とタリーカ研究の見通し
3. 学会等名 スーフィズム・聖者信仰研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸山 大介
2. 発表標題 寛容と排他に揺れるスーフィズム - スーダンに見る政治との距離感 -
3. 学会等名 上智大学イスラーム研究センター・京都大学イスラーム地域研究センター主催連続講演会『今日のスーフィズム - 神秘主義の諸相を知る -』
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Maruyama Daisuke
2. 発表標題 The Connotation of Batin and Zahir in the Context of Sufism: A Case Study of Contemporary Sudan
3. 学会等名 Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丸山 大介
2. 発表標題 概要説明 - タリーカ論構築に向けた覚え書き -
3. 学会等名 スーフィズム・聖者信仰研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山 大介
2. 発表標題 スーダンにおけるタリーカ概念
3. 学会等名 スーフィズム・聖者信仰研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 赤堀 雅幸(編)、赤堀 雅幸、東長 靖、ダヌシュマン イドリス、藤井 千晶、丸山 大介、二宮 文子(執筆)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター	5. 総ページ数 108
3. 書名 今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る	

1. 著者名 TONAGA Yasushi and FUJII Chiaki (eds.) Mohammed SOORI and Ahmed ZILDZIC, TONAGA Yasushi, Mohammed MOUSSA, SAWAI Makoto, FUJII Chiaki, KISAICHI Masatoshi, Shahzad BASHIR, INOUE Kie, Florian SOBIEROJ, MARUYAMA Daisuke, Nile GREEN (contributors)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University	5. 総ページ数 208
3. 書名 Debate, Dialogue and Diversity in Sufism	

1. 著者名 高井啓介、杉木恒彦(編)丸山大介、渡辺和子、高井啓介、小堀馨子、上村静、細田あや子、志田雅弘、虫賀幹華、津曲真一、鈴木健郎、長谷部八朗(部分担当)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 376
3. 書名 霊と交流する人々 - 媒介者の宗教史 - 下巻	

1. 著者名 Tonaga Yasushi, Fujii Chiaki (editors) Maruyama Daisuke, Arai Kazuhiro, Komaki Sachiyo, Morimoto Kazuo, Takahashi Kei, Tonaga Yasushi, Yasuda Shin, Carl W. Ernst, James W. Morris, F. Canguzel Guuner Zulfikar, Ahmet Murat Ozel, Bruce B. Lawrence, William C. Chittick, Nakanishi Tatsuya et al. (contributors)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University	5. 総ページ数 383
3. 書名 Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------